

人間じんかんにう生まれて

「つながりを生きよう」 325

「二重国籍」

「娑婆しあはにおりながら往生おんじやうが決まっている」

極楽はありといえども片だより
冷や飯食うても娑婆しあはにおりたい

と言う歌もあります、浄土を宗とするとはいったいどうということ
なのでしょう。安田理深先生は『二重国籍』をいただく」とよく
言われました。

馬川さんの法話より

まだまだ暑い夏が続いてい
ますが、いかがお過ごしでしょ
うか。体に十分気をつけて過
ごしましょう。もうじき秋が
来ます。

大谷派富山教区では教化
テーマが発信されています。

『ともに生きよ』

「南無阿弥陀仏」

〈テーマ解説〉

『人間は自分の思い通りにな
るような人生を描えがき、都合の
良いように生きようとする。』

しかし、その思いはいつも眼の前
の厳しい現実げんじつに打ち砕かれる。自
分だけが損ひんをしていると感じ、ま
わりを傷つけ自ら孤立こりし、過去こに
囚とらわれ未来みらいを憂うれい、苦しみの人
生を送る。

今、人間の力では抗あらがえるすべ
のない自然しぜんの脅威きょうゐという現実も
私たちは体験たいけんすることとなった。

だからこそ、南無阿弥陀仏の
響ひびきから「ともに今いまを生きよ」と
いう呼び声よびこゑが聞こえてくるのであ
る。「ともに」お互いたがひを尊たがび合あい、

現実げんじつの只中ただなかで、「今いまを生きよ」と。
』

皆みなさんのところにお念仏ねんぶつの
声こゑは聞こえているでしょうか？

浄土じやうどの仏ぶつから私わたしたちに向か
つて「ともに今いまを生きよ」と願ねがい
をこめた呼びかけよびかけが続つけられ
ています。真宗しんしゆの法話ほふわの中に、
語かたられてきている、「浄土じやうど」、
「念仏ねんぶつ」、「願ねがい」の心こゝろをご一緒いっしょに
聞きかせてもらいましょう。

9月真敬寺行事予定

8日(日) 日曜学校 午前9時
お寺でアート

9日(月) 正信偈の会 午後1時半

17日(火) 定例聞法会
午前・午後
法話 畠山浄さん

22日(日) 日曜学校 午前9時

29日(日) 役員会 仏具磨き

定例聞法会の聞書

立教開宗800年

『大経 東方偈』から

馬川透流 さん

南砺市徳成 真教寺住職



私たちは、人が亡くなられたとき火葬のあとお骨を骨瓶に収めますが、その骨瓶に

其佛本願力(ぐぶつほんがんりき)

聞名欲往生(もんみやうよくおうじょう)

皆悉到彼国(かいしつとうこく)

自致不退転(じちふたいてん)

と書かれてあります。これは『大経』の中の「東方偈」にある一文です。これは昔から、「破地獄の文」といわれている文です。

法然上人が書かれた『三部経大意』という書物にこのいわれを引用されています。その中のこのようなエピソードがあります。

昔、玄通律師というお坊さんが地獄に落ちられ、閻魔様と対面されたときに、「せつかく仏道を歩んでいたのに何で地獄に落ちてきたんだ」と、閻魔様にまんでやめかれたそうです。「せつかく仏道を歩んできたのなら何か覚えている言葉はないのかと問いかけられたそうです。玄通律師は「ほとんどの言葉は忘れたけれども、この『其佛本願力 聞名欲往生 皆悉到彼国 自致不退転』の言葉は覚えています」と

答えたそうです。それを聞いた閻魔様はびつくりして、その時に地獄の釜の底がカシャーンと割れて玄通律師は地獄から免れた、という話なのです。それでこの言葉は「破地獄の文」と言われているそうです。このことから骨瓶に書かれる習慣になったそうです。

親鸞聖人も『教行信証』の「行の巻」に引用されているのですが、ただ地獄へ落ちたくないからと言うことではなく、もっと大切な事柄がここに述べられているからだと思えます。

『尊号真像銘文』では次のように解釈しておられます。

「其仏本願力」というのは、弥陀の本願力ともうすなり。「聞名欲往生」というのは、聞というは、如来のちかひの御な(南無阿弥陀仏)

を信ずともうすなり。「欲往生」

というは、安樂淨刹にうまれんとおもえとなり。「皆悉到彼国」というは、御ちかいのみなを信じてうまれんとおもう人はみなもれず、かの淨土にいたるともうす御ことなり。「自致不退転」というは、自は、おのずからという。おのずからというは、衆生のはからいにあらず、しからしめて不退のくらいにいたらしむとなり。自然ということばなり。致というは、いたるといふ、むねとすという。如来の本願のみな(南無阿弥陀仏)を信ずる人は、自然に不退のくらいにいたらしむるをむねとすべしとおもえとなり。不退というは、仏にかならずなるべきみとさだまらるくらいなり。これすなわち正定聚のくらいにいたるをむねとすべし

しと、ときたまえる御のりなり。

(『真宗聖典』513頁)

南無阿弥陀仏の御名を聞かせていただくのは、自^{おの}ずから不退転に至ること。「不退転」とは、間違いなくお淨土に生まれ、間違いなく仏さまにさせてもらえる身に、今、させてもらえることを言います。

私は、親鸞聖人は法然上人がお念仏申されている相^{すがた}にふれて、煩惱だらけの自分が淨土に生まれ、仏さまになるに違いない身にさせてもらえるのだということを非常に大切にされておられたと思います。



『正信偈』に、「真宗教証興片州」と、法然章のところに書かれてあります。

「片州」というのは私たちの今住んでいる日本のことです、大陸から見ると日本は粟粒を散らしたような小さな島の国だったので「片州」と呼んでいました。

法然上人はこの「片州」の日本では何をしてくださったか方かといえ、ば、真宗の教えと証(あかし)を「片州」に興して下さった方であり、それは「淨土」の真実を宗(むね)とする教えをこの「片州」日本に興して下さった方であると書かれてあるのではないかと思えます。



「淨土」は私たちの今住んでいることと何も関わり合いのないことと思いがちです。淨土は死んだ後の話なのに、なんで私たちの生活の宗^{むね}にな

るのでしょうか。くどいようですが、私は法然上人は「浄土」の教えと証しを興された方だと思えます。

人が亡くなることを「還浄」とか「永眠」とか言われる方がおられますが、安田理深という先生は、不退転（私がこの娑婆にありながら、浄土に生まれるに違いない、仏にさせていただくに違いないこと）の数に入れていただくことには、「二重国籍」をいただくことだ、とよく言われました。

毎日の生活が、「お浄土を背景」にした「二重国籍」をいただくことだと言われたそうです。今娑婆にいなながら浄土の国籍を同時にいただくことだといっておられます。

実際のお話は
YouTubeで
視聴できます

下のQRコードを
お読みください



9月の定例聞法会は

17日(火) 午前9時30分～ 午後1時30分～

法話 講師 畠山 浄 さん

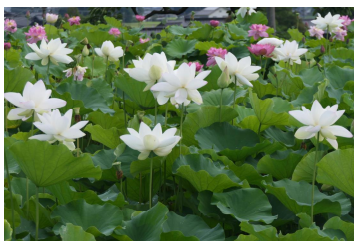
(石川県七尾市 西佛山常福寺住職)

8月は本山で研修を受けてきました。阿弥陀堂、御影堂での朝のおつとめ、講堂での夕のおつとめ、一日法衣で過ごし、本尊を中心とした生活に、気持ちが変わった気がしました。

10月には自坊の報恩講を迎えます。9月29日は仏具磨きを行いますので、お時間のある方は、ぜひご参加下さい。茶菓の準備をしてお待ちしております。みなさんとお話しながら報恩講をお迎えする準備ができたらいいなと思います。

南無阿弥陀仏

(坊守より)



広谷の蓮畑

発行 〒939-1664富山県南砺市竹内440
真宗大谷派(東) 小塚山真敬寺 宮地
0763-52-0196 携帯電話090-3760-



shinkyouji.com

検索

